True Magic

走馬灯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｔｒｕｅ　Ｍａｇｉｃ

【Ｎコード】
Ｎ０１７１Ｙ

【作者名】
走馬灯

【あらすじ】
「こういう話があるのを知っているか？」　「悪いその話前にも聞いたわ」　「聞いたなその話、お前それ何回目だよ」　「俺が金髪美少女とどうやって懇ろになったかっていう話なんだけど前も話したっけ」　「いや、まてその話聞いてないわ」　「おい、それは聞いてないな、どういう話だよ」　「あれは三年前の夏だったかな」　「ああ、その話か～聞いたわ」「聞いたなその話、何回目だよ」
「・・・・・・」

サブタイトルとかあると逆にわかりにくいと思うんだけど、どうよ？

話を変えようか。え、いやそもそも話自体が始まっていないって？
それは悪かった。
でも、しかし、いやおっとすまないこんなにも口ごもるなんて俺、
いや僕らしくもない。
いや実際口ごもっているわけじゃないがね。
どうして出だしからこんな口調なのかって？いやいやたまにはこん
なのも悪くないだろ？話が進まないって？
すまない僕が悪かったそろそろ主題に入ろうか。まぁ特にこれとい
って特徴のない僕の。いや俺の話をね。
「君は魔法を知っているかい」突然かけられたその質問に僕、いや
俺だったか、は答えた。
「もちろんだ、というかなんだ今更魔法について禅問答する気はな
いぞ、というかそのいつも突然わけわからん質問を投げかけるのは
やめろ、俺が質問に答えるのがめんどくさいわけじゃない質問を投
げかけられること自体がめんどくさい。というかお前がめんどくさ
い」
「おいおい、なんだいそれは君あんまりにもひどいよ、ひどすぎる
と言っても過言じゃないよ、私の羽毛のように繊細な心は深く傷つ
いたよ、慰謝料を求める」
「はっ」よよよっと泣き真似をする義妹に俺は鼻で笑ってやった。
「義兄よ、私は君が私に対する態度を改善する気がないのであれば、
今夜の夕食をカレーライスにする覚悟がある」
どうしてカレーライスなのか。という疑問はもっともだろう。
カレーライスは万人受けするメニューの一つとして名高い。
が、何事にも例外というものは存在するものだ。
その中に俺が含まれている。
俺はカレーライスが大嫌いである。何が嫌いなのかって存在そのも

のが嫌いだ。
理由？そんなものはない。嫌いだから嫌いなのだ。そもそもドラマやらアニメやらラノベやらでヒロインや主人公どもがのたまう「好きに理由なんていらないよ」というセリフがあるだろう。
だったら別に嫌いにも理由なんていらないってことになるだろ。屁理屈だって？
上等だよ俺はカレーライスが大嫌いだよ！でも勘違いしないで欲しい味は嫌いじゃない。
はぁすまんすまんすっかり話が逸れてしまったな。どこまで話をしていたんだっけ？
そうか俺がクリームシチューも嫌いだっていう話だったか。
「ちげーよ、私とコミュニケーションを取っていたところだよ、可愛い義妹であるところのこの私、相馬楓と朝のさわやかな挨拶の途中だったんだよ君」
さりげなく義妹という所と自分の名前をアピールする辺り我が義妹ながら流石といったところか。
「悪どい女だ」
「おいっ思ってることが声に出てるよ。せめてもっとオブラートに包もうよっ」
キャラがまだ明確に確定していない現在こいつは果たして自分のキャラが激しくプレていることに気づいているのかいないのか。
「それにしても惜しい女だ、優れた容姿滑らかな黒髪ロング胸もそこそこ、これでオツムが弱くなければ義妹から性奴隷にランク上げしてもよかったのにな」
「おい、だから思ったことそのまま口に出すなっていうか何！？義妹からランク上がると性奴隷になんの！？というかセクハラだよっセクハラ。実の義妹に対して言うことじゃないよっていうか私オツム弱くないしむしろ強いしありえないし」
ゼーゼーと息を切らしつつも怒鳴り散らす義妹を尻目に俺はモーニングコーヒーを啜りながら一息つく。

やはり朝はこの泥水に限るな。
「おい」
未だにゼーハ―言いながら胸をでかくするために飲んでいると思われる牛乳をがぶ飲みする義妹に対し俺は現実を突き付けた。
「遅刻だ」　時計が指す時間は９時ジャスト、完全な遅刻だった。

ヤク中でアル中のウィザード　ファウゼー・クロロ・シュタット・シュヘンベル

義妹は兄である俺を置いて家を飛び出していった。魔術師としては義妹は非常に優秀だが、いくら生態系魔術や自然系魔術の「疾駆」を駆使したところで最早遅刻は免れない。気の毒なことだ。
そして俺はというと得体の知れない生物と対峙していた。
黒くてスケスケのネグリジュを着た女が道のど真ん中でうつ伏せに倒れていた。
ゆっくりと近づくと女が実に理想的なスタイルの持ち主であることがわかる。
肉付きの良い尻にくびれたウエスト、胸もうつ伏せの状態で体の横からはみ出すほどだ。
朝からめんどくさい奴に出会ったものだ。
十分に視姦した後、俺はゆっくりと女に近づき無造作に腹を蹴り上げた。
ぐぇっという短いうめき声を上げてビクビクと痙攣する女。
これぐらいしないとコイツは目を覚まさないのだ。
「今日もイカしてるぜイモータル」やがて女からくぐもった声を放った。
「ヤク中でアル中のファウゼーは死ね、氏ねじゃなくて死ね」こいつと会う時はいつもロクでもないことが起きる時だ。短い付き合いでも俺は嫌というほどそれを味わってきた。
ファウゼーというのはこの女の名前だ。コイツは超重度のアル中でありヤク中でもある。俺が出会ってからこいつがクスリをキメてなかったのを見たのは一度しかない。
そして、イモータルと呼ばれたのはもちろん俺である。もちろん本名じゃないが、説明はめんどくさいので割愛。
「そんなカッカすんなよなぁ私とお前の仲じゃないか」そう言いながらファウゼーはのっさりと立ち上がった。

思わずその端整な肢体に釘付けになる。ファウゼーのこんな姿は今まで何回も見てきたが、やはりこの女の体は雄を強烈に惹きつける。肉付きの良い胸も尻もくびれた腰もムッチリとした太腿も二の腕も全てが甘く柔らかい蜜を放っているように感じる。
思わず手が伸びてファウゼーに触れそうになったが、踏みとどまった。
「流石だなイモータル私の魅了（チャーム）から逃れられる男なんてそうそういねーぜェまぁ触れたら殺すがな、もっともお前だったら触らせてやってもいいんだぜ、なんなら最後までやらせてやるよ」
くそ、この女のせいで１５Ｒどころか１８Ｒのタグを付けなきゃいけない可能性が出てきた。
「体だけだったら超好みだが生憎と酒くせぇしクスリくせぇし願い下げだな」
俺の強がりにニヤニヤとファウゼーは顔を歪めた。そんな表情はファウゼーの美貌を際立たせどこかインモラルな匂いを放つ。
「最近流行ってるドラッグでオススメのがあるぜ、ブラックペッパーつって一粒で一発昇天しちまいそうなほどの快感が脳天直撃。まず常人じゃ耐えられなくて廃人決定。アタリどころが悪けりゃマジで一発昇天しちまうシロモノさ」
そう言いながらファウゼーは黒い粒を口に放り込んだ。
途端にファウゼーの体がビクビクと激しく痙攣する。
「アーコレだよコレ、マジで最高だわイッちゃいそう」
傍目から見たら正気とは思えない光景だが、俺は慣れたものだ。コイツと付き合っていく上でこの程度のことで一々動揺していたらとてもやっていけない。
「わかったからさっさと用件を言え。まさか何も用事がないのに俺に会いにきたわけじゃねーんだろ」
時計を見ると既に１０時を越えていた。遅刻というレベルではない。
「ハーそこまで言うなら仕方ないねーな、一応清めとくか」ファウゼーが軽く指を鳴らす。

ファウゼーの体が黒い炎に包まれる。次の瞬間に炎は消えネグリジェ姿のヤク中でアル中のファウゼーの姿はなく不適な笑みを浮かべた私服姿のファウゼーがいた。
初級魔術の「心衣」というやつだ。魔力を合成し衣服を生み出している。
魔力の供給をしなくても一定時間持続するが、燃費があまりよくないので使用している者は少ない。
そしてファウゼーが同時に使用したのは生体系中級魔術である「浄化の炎」本来は体に蓄積されたダメージを取り除く魔術だが、クスリやアルコールの過剰摂取も浄化することが出来る。
「かぁあああああ禁断症状とか二日酔いとかでまくりの状態からの浄化はやっぱ最高！死にたくなるような苦痛から一気に覚醒するこの感じ！はー病み付きになっちゃう」
常人には理解不能というか理解したくもない快楽にファウゼーの顔はグズグズに蕩けきっていた。
今のファウゼーを見たら１００人中９９人の野郎は襲い掛かるだろう。それくらい卑猥な表情を晒していた。
ちなみに襲い掛からない一人は俺だ。
「それじゃイモータル今日の分頼むよ」ファウゼーはまるでオモチャをねだる子供のような無邪気さで言う。
「何がそれじゃだよふざけんなよ」ファウゼーが言っているのは魔力供給のことだ。
ファウゼーは魔術師の中でも最高位に位置する魔法使(ウィザード)いであるが、大きな欠点を抱えている。
それが魔法欠乏症と呼ばれる体質だ。通常魔術師は蓄えられる魔力の最大値が決まっていて使用する度にそこから消費され時間の経過によって回復する。
しかし、魔力欠乏症は一度魔力をしようしたら回復しない。
従って使い続ければ魔力が枯渇し死に至るケースもある。
滅多に存在しないがファウゼーはその体質の持ち主だ。ゆえに定期

的に魔力の供給を受けなければいけない。
そして、その供給役が俺というわけだ。
だがファウゼーは他人から無理やり魔力を奪うという特技がある。
一度どうして俺から魔力を補給するのか聞いたことがあるが「イモータルの魔力が一番気持ちよいから」という答えが返ってきた。ため息もでない。
「さっさと済ませろよ」
魔力供給することは別段たいしたことではない。
俺が嫌なのは、こいつが本当に――――イカれてやがるからだ。
「いただきまーす」
ファウゼーが思いっきり振りかぶったナイフが俺の首筋に叩き込まれた。

ヤク中でアル中のウィザード　ファウゼー・クロロ・シュタット・シュヘンベル

True　Magic　豆知識

ファウゼーオススメのブラックペッパーは一粒１０万もする超セレブドラッグである。二粒以上摂取すると高確率で死に至る。

The die is cast

首筋にナイフを叩き込まれた俺は、慣れていたこともあり悲鳴などは挙げなかった。いや、まぁ当然痛いのだが、事前にこういった痛みが来るものだと知っていてそれに対する覚悟を決めればある程度は我慢できるものなのだ。人間って不思議！

気絶するような痛みに顔をしかめる。ちょうど頚動脈を断ち切ったのだろう噴水のように血があふれ出る。普通なら即死するような一撃だが、そこで死なないのが俺がイモータルである所以だ。

ファウゼーがたまらないといった風に俺の首筋にしゃぶりつく。ファウゼーが使ったのは単なるナイフではない、体内に溜めている魔力を傷つけた箇所から強制的に流れ出るようにする特殊な魔道具だ。魔力と血液が大量に失われていく感覚に俺はたまらずファウゼーの体によりかかるように倒れこんだ。

豊満な胸に顔がうずまるが感触を楽しむような余裕は微塵もなかった。平時ならもっと吸ったり揉んだり匂いを嗅いだりと楽しめたのにチクショウがッ。

そんな俺の様子にニヤニヤと顔をゆがめるファウゼー。

「いつもこんな風だったら可愛いのになァ」

クソッタレ。と言ってやりたいところだが、生憎と口からはヒューヒューという掠れた音しか出てこなかった。

口もとを血だらけにしたファウゼーは満足したのか、魔力補給をやめた。

既に首の傷は塞がっている。

「ごちそうさまー」

またお願いね。そう言ってファウゼーは俺の前から姿を消した。

朝から最悪の気分だ。魔力補給は体の接触なしでも十分可能だ。しかしファウゼーは必ず俺の体を傷つけて血と共に魔力を吸う。ファウゼー曰く俺の血は格別においしいとか。もちろん奴は吸血鬼では

ない。
高位魔術師にまともなのはいないとよく言われるが俺の経験上８割は正解だと言える。
どいつもこいつもロクな思考回路を持っていない。ぶっ飛んだ奴が多い。
死に体で俺は俺が通う悪栄魔術学院にたどり着いた。
悪が栄えると書いて悪栄。何でもこの学院が建てるために使われた金は、相当汚い金だったとか。
この名前はそういった意味でなかなかのブラックユーモアに溢れるじゃないかと思う。
汚い部分を隠さずさらけ出す様な態度には好感がもてる。学院としては失格だがな。
既に昼を越えている。悪栄のグラウンドではちょうど授業が行われていた。
実戦形式の訓練のようだ。色取り取りの魔方陣が空中や地面に浮かび、どでかい破壊音が響いている。
「どいてどいてどいてぇえええええええええ」
女が吹っ飛んでくると思った時は遅かった。
強烈な衝撃と共に後方に派手に飛ばされる。二人で絡まってグラウンドの乾いた地面に線を引いた。
なんか柔らかい物に俺の顔は埋もれていた。なんかすっぱい臭いがするなおい。
それがパンツだと気づくのに時間はかからなかった。
すーはーすーはー。うむ。
「ちょっちょちょちょどこに顔突っ込んでんのよっ」
馬乗りになっていた女が飛び上がるように退き、俺の顔に顔面キックわかました。
「いてえええええええええええええ」俺は顔を抑えて地面をのたうちまわる。予想外の攻撃には弱いのだ俺は。
「なに人のパンツに顔埋めんてんのよっしかも匂いまで嗅いでるし

ッ馬鹿なの？死にたいの？ってかもう殺すわ死に晒せ死ねっ」追撃として繰り出された攻撃魔術を俺は必死に体を回転させて避ける。
やっと痛みが引いたので、相手の顔を確認する。
まず目の光を反射して目が痛くなるような金髪を確認。少しウェーブがかかっていてふわふわしている。次に顔、美人だ。切れ長の瞳、鼻が高く唇は少し湿っていて艶やかである。
胸はなかなかでかい。正直いってコイツの存在価値の半分は胸じゃないのかとすら思う。いや、そう言っても過言ではない。むしろ全てだ。
ここで俺はこいつが誰だか思い出した。同じクラスメイトの女だ。
名前は・・・・・・。
名前は確か九十九里浜紫式部だったか。
「殺すわよアンタ」
「人の心を読むなよ」
「アンタまた私の名前忘れてたでしょ」
どうして俺の心の内が分かったんだ！？まさかこれも魔術なのか。
だとしたら九十九里浜紫式部は一魔法使い《ウィザード》クラスの魔術師といっても過言ではない。
過言ではないって言い過ぎかもな俺・・・・・・結構好きなんだよね。
「アンタの浅はかな思考なんて顔を見ただけで理解(わか)るのよ、自分がどれだけちっぽけで瑣末な生き物なのかどうやら自覚がないみたいね」
酷い言われ様だが、俺は学院では至って真面目な一般生徒、悪く言えば地味で目立たない生徒として通っている。
そうしているのには色々理由があるが一言にまとめるとめんどくさい。いや待て一言にまとめるのがめんどくさいんじゃない、俺の素性というか本性というか過去がばれると色々めんどくさいことが起きるかもしれんってことだ。
ファウゼーを見てくれればわかると思うが、あんな堅気じゃないロ

クでもない奴が知り合いってだけで俺がどんな生き方をしていたのかわかるってもんだろう。
まぁそういうわけで俺は、できるだけ人畜無害な一般生徒になろうと努力してきたわけだ。
それなのにこの女(アマ)しつこい奴だぜ。
「どうした如月、何かあったのか」
九十九里浜改め如月をこっちへ吹っ飛ばしてきた張本人が現れた。
こいつは俺もよく知ってる顔だ。
「・・・・・君は今まで何をしていたんだい義兄よ」
義妹である。
どうやら如月の相手をしていたのは義妹のようだ。
「アンタの義兄さマジで最低ッ私のパンツに顔突っ込んですーはーすーはーってすーはーすーはーってしたのよっ本当に殺すわ殺すコロス」
「まっ待ってくれ如月、そんなクズみたいなゴミみたいなホント地球から消えろよカスって感じな男でも一応私の義兄なんだ」
お前(お前)どっちの味方なんだよ。義妹が日頃俺のことをどう思ってるのかよくわかったぜ。それでも一応俺の命を案じて言ってくれているっぽいので感謝するぞ。
「せめて苦しまないように殺してあげてくれ」
感謝なんか立ち消えたわ。
「パンツくらいで何を騒いでる。純情な乙女でもあるまいしお前みたいに遊んでそうな女、パンツだけじゃなく中身まで男に晒してるんじゃないのか」
「駄々だ〝だ〟だ〝タ誰が誰が遊んでるって？」
如月の鬼のような表情を確認。
俺は―――避けるｏｒ防ぐ。
↓避ける
俺は全力でその場から横っ飛びに飛んだ。
少し遅れて俺がいた場所に直径２メートルほどのクレーターが出来

る。間一髪。
「バッお前マジで今殺そうとしただろ」
「当たり前でしょこの女の敵！私は処女よそんな私が傷物ですってッ！何千万回殺しても気がすまないわ、光よ我が始祖たるセレスの浄化の光よ栄光を我に敵に死を『拒絶不能の黄昏（ノーブルトワイライト）』」
高速詠唱（ヘイスト）術に加えて光線系の高位攻撃魔術の同時展開。並みの魔術師を既に圧倒しているだろう技量。だが、俺には当たらない。
極大の光線は俺に直撃する一歩手前で屈折しあらぬ方向へと飛んでいった。
遥か上空で爆発。雲にクレーターを穿つ。
こいつ・・・・・・こんな威力の魔術を俺に喰らわせるつもりだったのか。
間違いなく直撃していれば死んでいた。
「今・・・・・・複合魔術『鏡花』？」
ご名答。複数の低位魔術を組み合わせた高難易度の魔術だ。光線系の天敵とも言える魔術だが、難易度の高さから術式の展開から発動までのタイムラグが酷くロクに使える魔術師は少ない。
「やっぱりアンタ普通じゃないわね」
今まで一般生徒として学院生活を波風立てずに過ごしてきた俺だが、中には俺に対して何らかの異常を感じ取った奴がいる。如月深鈴（きさらぎみすず）もその一人だ。
「今日こそアンタの化けの皮を剥いでやる」
おお、怖い怖い。だが、正直言って如月の実力は本物だ。準魔法使（ウィザード）いクラスの実力はあるといっても過言ではない。
光系統魔術だけで言えば魔法使（ウィザード）いクラスですら凌駕している。
本来俺のような見習（ノービス）い魔術師クラスが戦っていい相手じゃない。
しかし・・・・・・。
めんどうなことになったか。
先程から俺たちに注がれている視線に俺は気づいていた。
俺をマークしているほかの魔術師達だ。

魔術師という人種はどいつもこいつも自分を一流にするために余念が無い。相手を蹴落とし自分がのし上がる為には何でもする。
それが間違っているとは言わない。俺もそうやって過ごしてきた。
魔術師としてのあるべき姿だと思う。
まぁ昔の話だが。そういう魔術師としての在り方を俺は許容する。
だからってここまですることはないよな・・・・・・。
俺と如月の周りには多重結界が張られていた。
認識と視覚に加え魔術的感知を妨げる結界。高位魔術『霧の幻（アンクロディア）』
他の生徒や魔術教官、至近距離にいたはずの義妹ですら俺たちが認識できていない。
如月が張った結界ではない。この戦闘に興味を示した第三者による仕業。
まぁこれほど高位結界を張れる人間は限られているが。
とにかく今はどうやって如月から逃れるか。それが問題か。
「アンタっていつもいつも飄々として掴めない感じだったけど、それって演技なんでしょ。アンタには絶対なんかある」
言っておくが俺が飄々としているのは素である。この女は何を勘違いしているのか知らんが決して演技などではない。
たぶんコイツは恐るべき魔術的嗅覚で俺という異端分子について何か感じたのだろう。
ごくまれにだが、そういった才能の持ち主は存在する。
才能がありすぎるというのも問題だな。
思考を断ち切るように如月の詠唱が始まる。
またも高位の攻撃魔術。
今回はちとやばいかもしれんな。

The die is cast（後書き）

True Magic 豆知識

如月が穿いているパンツは、悪栄魔術学院裏ルートで使用済み一枚5万洗いたて一枚3万で購入できる。本物かどうか要検証

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0171y/

True Magic

2011年11月16日12時46分発行